

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

ゲーテ色彩論の特徴的主題

著者	畑 一成
雑誌名	国際哲学研究
巻	6
ページ	177-187
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008862/

ゲーテ色彩論の特徴的主題

畑 一成

1. 色彩研究の端緒

イギリスの若い貴族たちがフランスやイタリア、スイスなどを数年かけて旅するグランド・ツアーで度々転向的な経験を得たのと似て、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテもイタリア旅行で鮮烈で革新的な経験を得ている。彼は、イタリアで自身の植物形態学の要となる原植物の着想を得、後にヴァイマル古典主義のモチーフとして展開する様々な芸術を実見した。その旅行で学術的かつ芸術的経験を経たおよそ3年後の1791年5月に、ゲーテはあるプリズム実験を行っている¹。彼の『色彩論のために』に収められている「著者の告白」の章で語るところによると、彼はプリズムを通して白い壁を見、壁に反射された光が虹のように分光されて現れてくるのを観察しようとしていた。しかし期待した虹状スペクトルは現れず、彼が見たのは思いがけなくただの白い壁であった。鮮やかな多色の分光を探そうと、そのまま辺りを見渡す。そうすると窓の棧や壁と家具の縁に色彩が浮かんだで見出される。棧や縁は光と影の境界を形作っており、色彩はその境界に現れている。色彩が現れるためには境界が必要ではないか。光だけではなく闇も。ゲーテはその瞬間、「ニュートンの学説は間違っている」(WA II, 4, S. 295)ととっさに叫んだという。

この瞬間は、同時にゲーテの色彩に関する学的な研究の端緒であるとよくいわれる。実際にそこからアイザック・ニュートンの光学を激しくかつ持続的に批判することになる。しかしこの端緒は、ゲーテがイタリア旅行で得た諸経験が形をとって噴き出してきたものだと考えられるのではないか。つまりニュートン理論の不備を発見したことは、ゲーテにとって色彩研究の原因になったというより、あるきっかけにすぎなかったのではないかということである。ニュートンの光の物理学的考察に対するゲーテの反論は、確かに彼の色彩論全体の重要な部分を占めているが、それが全てであるとはいえない。ゲーテの色彩に纏わるより根源的な経験は他にあるのではないか。

ゲーテはそのプリズム実験を行った同年に初めての色彩に関する論文である「青について」を著している。ゲーテが色彩論に従事していた時期は一般的に3つに分けられ、その論文と『光学への寄与』を書いた1791年から1794年を第一として、それからゲーテ色彩論の中心的著書『色彩論のために』を著した1810年までを第二に、最後に内視的色彩を研究した1813年から1820年の間である。文献資料からこうした区分ができるものの、実際にいつゲーテが色彩に興味を持ち、探求を始めたのかは不明確であるといわざるをえない。ゲーテは色彩研究を芸術的側面から始めたことも述べており²、プリズム実験とは別に絵画での色彩の調和などがすでに彼の興味を引いていたといえる。確かに色彩論が明確な形を持って現れる以前から、色彩について言及した美学論などもあり、さまざまな色彩経験を美術館や自然で蓄積していったといえる。初期の美的経験、自然観察、イタリアなどへの旅行、物理学的実験など、そのどれが原因であったのか、あるいはそれ以外のもので

あったのかは様々推察しうるが、差し当たりそうしたものが交じり合っただけで徐々にゲーテ色彩論が形成されてきたのだと主張できる。

実際に感性的な経験から学的な色彩論へと徐々に成熟し、互いに調和しているのがゲーテ色彩論の特徴の一つである。ゲーテの主著の一つである『色彩論のために』は主に3つ部分から成り立ち、第一部は一般に教示編と呼ばれる「色彩論草案」と、論争編と呼ばれる第二部の「ニュートン理論の暴露」、最後の歴史編の「色彩の歴史のための資料」である。教示編ではゲーテ的色彩論の特徴的な主題が扱われており、彼独自の色彩研究の成果が多数含まれている。そしてそこにゲーテの様々な体験が収められている。本稿ではそのいくつかの特徴的な主題を論じたい。

2. 生理学的色彩

ゲーテは自身の色彩論を生理学的色彩でもって始めている。この領域の色彩が彼の色彩論全体の布石となっている。生理学的色彩でゲーテは主に色彩と眼の関係を述べており、最大の成果として補色の法則性の発見が挙げられる。彼の生理学的色彩の考察は、現代の色彩研究にも重要な知見を提供しており、一般的にニュートンとの対決に敗れたと見做されている中でも、破棄されずに受け入れられている。こうした成果を持って、ゲーテ色彩論が色彩の生理学的側面を扱い、ニュートン光学が物理学的性質を扱ったとカテゴリ分けがなされる。こうしたまとめは、ある一定の歴史の合理的再構成の観点から必然的に導かれるものの、そのまとめからは両者の探求の意図と全体の構想を再構成できない特殊な歴史の叙述となっている。その語り方は歴史的で経験的というより、概念的で記号的である。つまりゲーテやニュートンが何を見、何を行おうとしたかを想起し、追体験できないのである。わずかながらも彼らが見ていた風景がうかがい知るためには、そうした分類の前に、彼らが行った個々の具体的な営為を見る必要がある。

ゲーテによると当時はまだ生理学的領域が色彩研究の歴史において重要な構成要素と見られてなかったという。生理学的色彩が「これまで非本質的で、偶然的なものとして、また錯覚や疾患としてみなされていた」(WA II, 1, S. 1)と述べ、その法則性や体系性があまり研究されてこなかったという。奇形現象を植物のメタモルフォーゼで枢要な問題として扱ったように、ゲーテにとってこうした未知の現象、あるいは異常、病的、驚愕といった言葉で語られる対象の探求は必須の主題である。生理学的色彩は、これまで非本質的な疾患の現象だと見られていた。

具体的な生理学的色彩現象を分析する前に、この言葉が意味しているものについて述べたい。ゲーテの説明によると、

「我々はそれら〔歴史上様々に名付けられ、錯覚として扱われてきた色彩現象〕を生理学的と呼ぶ。なぜならそれらは健康な眼に属し、我々はそれらを視覚の必然的な諸条件として見做すからであり、それらはその内外への生き生きとした相互作用を指し示すからである」(WA II, 1, S. 2)

ゲーテは生理学的色彩を、身体の異常に起因する病的現象としてではなく、通常の眼にも現れる普遍的な現象としてとらえ、人間の視覚の必然的な現象と定めている。彼はここで生理学的なものを眼の身体的機能として扱い、外的な刺激に対する内的な生体的反応の関係という意味を持たせている。

さらにゲーテは教示編の補遺で次のように述べている。

「生理学的色彩と我々は網膜の作用と反作用によって発生すると思われるものを呼ぶ。それは、眼の他に特に物理的刺激やそれに対応するような同様の物質的現象が認められずに、光によって、また機械的あるいは過度な刺激によって引き起こされた興奮の際に、色彩の現象を魂の前に示すことによって発生すると思われるものである。それは、なんらかの仕方で眼の外に存在物を指し示しているある一定の色彩を見る際、全体性のため眼の中のある種の調和を目指す反応刺激がもたらされ、生き生きとそれ自身において色彩環を結ぶ。生理学的色彩の標識は視覚的なものであり、それらの中で持続的なものは病理学的現象である」(WA II, 5ii, S. 20)

この定義めいた堅い文章でゲーテは、生理学的色彩が網膜での外界からの機械的作用や外界からの作用に対する眼の反応によって惹起されるものと定めている。全ての色彩現象を物理的現象に還元できない。色彩は見るという行為によっても成立している。この行為としての色彩現象の中には「刺激」、「興奮」、「網膜」といった語彙で語られる身体の特性に起因するものがある。ゲーテはそうした色彩現象の側面を生理学的と名付けている。そしてそれにはすでに歴史上の諸研究によって形作られた伝統があり、ゲーテもそれを意識している。

生理学を意味するドイツ語のPhysiologieあるいは古代ギリシア語のPhysiologia(φυσιολογία)は、Physis(φύσις)という語に由来している。Physisは様々変遷があるものの総体的に自然を意味し、自然物やその性質なども含意していた。Physisに関する知が体系化され、Physiologiaという語で呼ばれるようになった時、それによって意味されていたのは生物に関する学問一般である。広い意味で同じく自然に関する学問で無生物を扱ったものはPhysica(φυσικά)と呼ばれていた。

古代ギリシアの医師ガレノスはこの生理学という学問に対して大きく貢献している。生理学は解剖学と深いつながりを持っており、ともに発展してきている。その解剖学的な探求は生物の物質的構造を明らかにするが、生物の活動の究極的原因については多くを説明できない。歩くために骨や筋肉があるというのは解剖すればわかるが、なぜそもそも歩くという行為が起るのか。その原因とは何かは解剖学的に未知である。こうした対置を物質と魂の対立として強調するなら、哲学的な身心問題となる。しかしガレノスは、著書『人体の諸部分の有用性について』(*De usu partium corporis humani*)においてこうした生物の物体性と活動性を質料性の議論の内部で結合しようとする。具体的にはアリストテレスの教説や固体的器官を重要視するアレクサンドリアの学者たちの議論を、血などの体液を決定的な因子と考えるヒポクラテスの教説とを結び付けるのである³。精神性には触れず、こうしたあくまで質料性に固執する生物の説明は、ジャン・フランソワ・フェルネルやアルブレヒト・フォン・ハラーによって受け継がれている。

ハラーの「感覚性 Sensibilität」と「被刺激性 Irritabilität」の学説は、それぞれ神経と筋肉の外界の物理的刺激に対する反応と、そうした刺激に即した内的な感応性の関係について説明している。彼の教説はルイジ・ガルヴァーニに並んで当時影響力が強く、カントやヘルダー、シェリングといった哲学者たちも大きな影響を受けていた。ゲーテもまさしくそうしたハラーの教説の影響下にあり、『詩と真実』において「ハラー、リンネ、ビュフォンの名を私は大きな尊敬の念を込めて挙げたい」(WA I, 27, S. 67)と述べている。ゲーテの生理学についての理解はハラーの刺激反応性の教説を受け継いだものと考えられる。ゲーテは1795年の小論「植物の生理学のための準備研究」に収められて

いる「生理学の概念」の項で次のように語っている。

「植物のメタモルフォーゼ、その生理学の根拠

それは我々に植物が何に向かって形成されているのかという法則を示す。

それは我々に二重の法則に気付かせる

1. 植物を構成する内的な本性の法則
2. 植物を変形する外的環境の法則」(WA II, 6, S. 286)

生物が持つ成長への内的な活動性が環境要因によって変化をこうむり、生物の目下の形態が気候などの環境と調和の表現であることはあまり疑問に思うことなく理解できる。ゲーテはハラー的な刺激反応性の教説を外的環境と内的本性の法則として受け継いでいる。

その他ゲーテは『植物のメタモルフォーゼ』で植物の本質的な体液として、物質的な「精妙な液」(WA II, 6, S. 37)を挙げている。彼は、ヒポクラテスやガレノスが述べている体液説を採り、その液体によって植物の成長を規定している。ゲーテはガレノスの伝統における生理学に立ち、精神的あるいは非物質的な生物の活動の原因をほとんど想定していない。生理学的色彩とは刺激とその反応の連関であり、外的環境と内的本性との相互関係である。ゲーテのいう内的本性というのは精神的作用ではなく、器官の質料的反応を意味している。つまり光に対する物質的器官としての眼の反応の関係である。

そのゲーテの生理学的色彩の最も重要な成果は、先に挙げたように補色の法則性の発見である。注目すべきはそれを発見した際のゲーテの記述である。

「太陽が沈もうとし、濃い霞がかかり、かなり弱められた太陽の光が私の周りの世界をこの上なく美しい緋色でもって覆ったとき、影に見える色彩が緑に変わった。その鮮明さは海緑色に比べられ、その美しさはエメラルドに比べられる。その現象はよりいっそう生き生きとしだし、まるで妖精の国にいるかのようにまでなった。すべては、日が落ち、艶やかな現象が灰色の薄暗がりへと、そして次第に月と星々の夜へと消えてゆくまで、この二つの鮮やかでとても美しく調和した色彩に彩られていたからだ」(WA II, 1, S. 35)

1777年12月10日にゲーテはハルツにあるブロッケン山に登っている。そこで彼は奇妙な現象に出会う。つまり緑色の影を見たのである。霞の中であろうと影には弱まった夕日の光があるだけのはず。そしてその影には弱い夕日の赤が見られるだけであり、そうではなくとも灰色に見えるだけのはずである。しかし実際には人間の眼に緑が現れる⁴。ゲーテは非常に詩的な文章でその様子を描きだしている。詩的に叙述しようとしたというより、正確に描写しようとする、自然と詩的な表現になってしまうような体験であったといえる。その中で、ゲーテは色彩の法則性を見出している。夕日の赤に囲まれる緑。赤は緑を呼び求める。この補色関係をゲーテは色彩環の中に位置付け、青は橙を、黄は堇色を呼び求めるといった他の組み合わせをも編入させ、総体的な法則性にまで高めている。つまり色彩環の中のある色彩はその向かい合う色彩を指し示す。これにより色彩環は、単に両端がつながり、円形をなすだけではなく、反対の色彩と結び付くという新たな関係を手に入れることになる。

学的言語と詩的言語がもはや明確に分けられない描写方法で、あるいは学的なまなざしと詩的なまなざしが分離していない観察方法で、ゲーテは補色現象を扱っている。そこで色彩は互いに、分極的な関係、あるいは隠喩的な関係を構築している。ゲーテ以前の色彩環は、赤が橙と似ているといった類似性でもってのみ形作られていた。あるいはニュートンも採用した音階のような比率の関係に似せて色彩環が形成されていた。直接的な類似性を表現する類比的関係でもって円環が成立していたが、補色により隠喩的対立関係を手にし、色彩環はより全体性と調和性を強めていく。

この影の色の発見はゲーテの生理学的色彩の特徴的な探求の仕方を表している。夕日の中の緑の影という補色を見出すことは、簡単なことだと思える。珍しい発見というより、本来日常的に見られる現象である。しかし、それは思うほど簡単ではない。なぜならそれは通常ただの錯覚としてしか見做されないからである。影が彩られて見えることは、ゲーテ以前にもすでに明らかなことで、種々述べられてきていた。しかしゲーテによるとそこでは補色の現象は単に「偶然」(WA II, 4, S. 196)なものではないと思われていた。

この種の現象解釈はある種の分割であり、現象を二分してしまう。つまり一方で眼前の現象が偶然であり、見せかけであり、幻覚であると主張することは、他方で本当の現象があると想定することになる。これは典型的な関係カテゴリにおける偶有と実体の問題である。主である実体と従である偶有は、それぞれ真の原因とその派生的な作用という構図を形作る。ことに自然的な色彩現象においては、本当の色彩の姿として光の物理学的性質が指定され、その随伴現象として生理学的な色彩が現れると考えられている。物理学が扱うような光が実体であり、直接眼に現れるだけの卑近な色彩は偶有であるという構図は、ゲーテ時代に限らずそれ以前や現代でもよくみられる。

実体から偶有への移行には、様々な仕方があるが、新プラトン主義的な流出という仕方が基本である。実体から漏れ出る光はその実体としての性質が付与され、必然的關係を有しているが、闇という無秩序に流れ込むことによって偶然的な環境におかれ、その必然的な性格を薄めることになる。不変純粋な太陽、あるいは光が、地上の偶然的条件によって、さまざまな姿に抑制され、汚される。それが色彩であり、夕日という薄明かりの中、何かしらの媒体によって作られた影に現れる色彩が、偶然の色彩現象、つまりは緑である。

しかしゲーテはこの偶然と呼ばれてきた現象に必然性を付与し、法則の地位を与える。むしろ偶然か必然かというカテゴリを排除し、眼に現れる現象を第一のものとして受け入れたといった方が正確である。物理学的光を想定する場合、それはある一定の波長で運動する物質または事象であって、それに感覚的な色彩を対応させる必然性は本来ない。その意味で知覚の外側に色彩は存在しないといえる。したがって本当の色彩、あるいは偽の色彩という区別は本質的なものではない。いかなる仕方であっても知覚されている色彩は、それそのものとして受け入れるほかない。つまり眼の前の色彩がすでに根源的なものであり、さらに遡及して現象を裏付けるようなものをより根源的なものだと見做す必要はない。オリジナルといえるものは色彩現象の方であり、その裏付けや証拠といった現象解釈はいわばコピーでしかない。コピーでもってオリジナルを証明しようとするのは社会的な風習であっても、学的探究の前提でなければならないわけではない。影の色の緑は、錯覚ではなく、この上なく緑だけである。

ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインは『色彩について』で言語ゲームとしてこうした問題を扱っている。彼によると、色彩と我々が言語によって呼称するものは、「生活形式」において成立している。その形式は世界に関する認識を積極的に分節化し、知覚世界を統語的に構造化している。彼

がいうには、我々は言語的コミュニケーションの文脈すべてから外れるような無制約的な裸の現象を一切知覚しえない。むしろ我々は生活形式によって構造化された諸現象を見るだけである。したがって、光が十分当たっていない白い紙は、灰色であるといわれず、依然白であるといわれる。なぜなら色彩の文法構造はすでに何を白と呼ぶべきか、そしてどのように知覚すべきかを規定しているからである。生活形式は眼に現れる色彩の背後ですでに色彩知覚を根本的に決定している。

現象解釈ではなく、知覚の構造を解明しようとする点でゲーテの生理学的色彩とヴィトゲンシュタインの言語的色彩は軌を一にする。しかしながら現象の背後の文法構造を根源的なものとするヴィトゲンシュタインに対して、ゲーテはあくまで現象そのものに固執する。彼にとってそれが最も根源的なものであり、生理学的色彩が色彩論の口火を切る章として位置づけられているように、眼に映る単純な現象が全ての始まりである。無地の紙は昼の日の光のものとは白と現れる。夜ろうそくの光の下であっても確かに誰もそれを橙色の紙と呼ばない。だがゲーテは、夕焼けの中の影の色を緑と呼んだように、そのろうそくの光で照らされる紙の色も、おそらく橙色に見えるといっただろう。ゲーテはヴィトゲンシュタインが行ったような知覚の背後にある文法構造、あるいは現象と言語の関係の探求を否定しない。それそのものは一つの探求対象であるが、それが色彩探求のひな型であるとは認めなかったであろう。眼前の最も未分化な現象が色彩論の端緒であり、その背後の関係は枝であり節でしかない。

生理学という言葉には、ガレノスやハラーなどの身体的な反応性に関する伝統が含意されていると同時に、あらゆる判断の前に成立している無規定の現象そのものの探求という主題も含まれている。そこにはこれまで偶然、奇妙、異常などといった言葉で表現される現象が含まれていた。というよりそうした現象がゲーテ色彩論への入り口であり、主題であったという方が的を射ている。異常か正常化か、あるいは偶有か実体かといった現象判断は、事後的なものであり、根源的なものであるとはいえない。判断が下される以前、カテゴリの区別が適用される前の現象との出会いが、ゲーテ色彩論の大きな特徴の一つであり、ブロッケン山での影の色彩の記述である。そこに科学と芸術が収斂されていく点があり、哲学的課題が様々展開する点もある。

3. 化学的色彩

そうした出会いはより端的に化学的色彩で記述されている。化学的色彩の領域はゲーテ色彩論の三番目の章という位置を占めている。第二の章では物理的色彩が扱われており、主にプリズムを使った色彩現象が扱われている。ニュートンの光学と構成が似ているが、様々違いがあり、その中の最も大きな違いは、プリズムを覗いて色彩現象を見るという、ゲーテが主観の実験と名付ける観察方法である。本稿ではこの領域でのゲーテの探求を論述しないが、他の領域と同様にゲーテ的色彩論の諸特徴を見出すことができる⁵。

化学的色彩の章では、主に物体表面の色彩が扱われており、例えば鉱物、顔料、有機体の色彩などが挙げられている。そこで酸性、アルカリ性といった二つの対立する性質が化学的色彩の基本的な探求方針を決めている。例えば、鉄を熱すると表面は赤くなる。さらに熱し続けると、赤い表面はさらに明るくなり、黄に変わっていく。ゲーテはこの酸化の過程における色彩の変化を色彩環内部での高昇、あるいは移行として見ている。炭化された木はその残留物質であるカルシウムとカリウムのせいでアルカリの性質を帯び、青とも表現されるような暗い色をしている。アルカリは一般

的に寒色に位置づけられ、酸化の度合いが増すにつれ暖色の方へ移行するとされる。こうした色彩環における二元対立的構図でもって、ゲーテは様々な物質の色彩を論じている。

化学的色彩でゲーテが扱った液体濃度の増減による色彩の変化と染色でのその作用、植物の生長によって変化する色彩等は、現代的観点からは減法混色の部類として扱われている。ディスプレイやプロジェクタなどで使われている光線の混色は加法混色と名付けられており、ゲーテ色彩論では物理学色彩の中で主に扱われている。化学的色彩における混色の独特の作用は、確かに重要な特徴であるものの、ゲーテにとってそれが物理学的、あるいは生理学的色彩と区別をなす特徴ではない。彼によると「持続性がその主な標識である」(WA II, 1, S. 200)。生理学的色彩では、眼に現れている限りの色彩が扱われており、眼を逸らすなどすれば比較的早くその現象は消える。物理学色彩は光源が持続する限りで現れるもので、夜になれば消失してしまうような条件付きの色彩である。化学的色彩では物体表面に現れるもので、酸化といった比較的長い時間が必要なものや、鉱物などほぼ変化しないものが扱われている。それぞれの領域は質的に隔てられているわけではなく、統一的な色彩現象全体のある一側面を取り上げているにすぎない。

先に触れたように、化学的色彩では様々な物体や生物が扱われており、探求の課題は多岐にわたる。持続性が重要な標識であるにしても、化学的色彩のその他の標識なり特徴なりは数多く取り出さう。ここでは再び出発点として設定された事象を取り上げたい。化学的色彩で一般的な説明の後にはじめに扱われるのは「白の導出」(WA II, 1, S. 203)である。そこでゲーテは雪を挙げ、そこから白が導き出されると述べている。雪は、水が結晶化し徐々に透明性を失うことで現れる。その様子をゲーテは『光学への寄与』で述べている。

「最も小さな粒における最も純粋な水は固体性と同時に不可入性へと移行する。そうすると我々は雪を見ることになる。その堆積は最も純粋な表面をあらわにし、その表面は今や我々に完全で打ち砕きがたい白の概念を与える」(WA II, 5, S. 130)

ゲーテが白と呼ぶものは具体的な対象から離れた伝統的名称ではない。誰かからそう呼ぶように教えられたものでもなく、最も光を反射する表面などといった学的探究によって明らかになる抽象的説明でもない。むしろ雪を経験したときのあの印象、今まさに感じたあの色彩のことを白と呼ぶのである。ゲーテは白の具体的な一例として雪を挙げているのではない。白という概念が雪という事物に先立っているのではなく、雪という現象を体験することではじめて白という言葉でかろうじて指し示せる何かを手にする。雪は白という概念の間接的証拠ではなく、白そのものである。最も純粋な透明性が消える瞬間、我々はある印象を手にする。それが白である。もはや雪が白と呼ばれる必然性もなければ、白が雪であると指示される必要もないところで出会う体験が「白の導出」で語られていることである。

このゲーテの記述は二つの特徴を含んでいる。一つは具体的な現象、あるいは体験が根本にあり、そこから探求が進められている点である。ゲーテの時代、すでに色彩論は長い伝統を持ち、さまざまな国の多様な研究者が色彩研究に従事していた。その中、化学的色彩でゲーテはごく単純な白という色彩の体験を記述している。本来ならば、そのような記述は不要なはずである。なぜなら白が何かは周知のことであるはずだからである。加えて、ゲーテの白の導出での記述は白の定義にもなっていない。端的に言えばこの雪を白と呼ぼうと欲しているにすぎなく、それで白の概念が導出さ

れたというにはあまりにも初歩的な表明である。ゲーテはその他いくつかの白い物質の例示を行っているが、そうした物質を集めてはじめて白が把握されるとは述べておらず、一つの経験で十分であると考えている。

たった一つの事象がなぜその全体を指し示すことができるのか。論理学的見地から、個と全体は両者とも単一性であり、外延が一致するといえる。しかし、ゲーテの記述は論理学的というより修辭学的言明であるといった方が事態をより明確にとらえられる。つまり雪は白の堤喩的關係において表現されている。堤喩とはある個物が特定領域の全体を表現するというもので、個と全体の関係を表している。具体的な事物である雪はより広範な概念である白を代表している。この表現により読者はあたかもはじめて白に出会ったかのような印象を受ける。ある単純な体験がそのまま全体を指し示すというのは、その体験以前にその領域での経験が欠けていることを示しているからである。様々なものを寄せ集めて白の概念を決定しているわけではなく、初めて雪を見るというたった一つの体験がそのまま白そのものを満たしている。白の導出という節でゲーテは白に纏わるある一つの純粋な体験を述べている。

二つ目の特徴として雪あるいは白の発生的表現が挙げられる。ゲーテは単に雪が白であるといっているのではない。いかに雪が発生するのか、あるいはいかに白が発生するのかを述べている。彼が書き記しているのは、水が透明性を失い雪になるという過程である。この連続的過程は白の根源的な発生場面を描いている。観察者はまさに色彩が産出される瞬間を見、自分の中に新しい印象が生まれるのを感じる⁶。こうした白の印象は、のちに悟性概念として抽象化され、眼の前にその色を見ることなく白について語るができるようになるが、ゲーテはそうした概念化される以前の無規定的で個別的な印象を探索の出発点として選んでいる⁷。そうした原初的な領域では、悟性は固定的存在しかとらえられなく、産出の瞬間に臨めない⁸。ゲーテの「白の導出」では、色彩との原初的な体験が述べられ、そこで色彩が発生してくる様子が描かれている。

4. 感情的色彩

ゲーテの色彩論教示編の第六章では、感覚的・精神的あるいは感性的・習俗的作用とも訳されうる色彩(die sinnlich-sittliche Wirkung der Farben)が取り扱われている。その章が教示編のいわば掉尾を飾る章であるといえ、この章にゲーテが色彩論で解き明かしたいと思っていた本来の目的が論述されている。つまり絵画などで見られる色彩の調和や、色彩に纏わる文化、色彩が惹起する感情などである。例えば絵画などでも見られるように、なぜ黄味がかった赤がフランス人には好まれ、青味がかった赤がイタリア人に好まれるのかを、ゲーテは主に色彩環を使いながら説明している。色彩環の中で見出される組み合わせとそれらの感情を論述しているが、こうした探索においてゲーテは生理学的や化学的色彩とまったく異なる概念を使用している。

この章において例えば、黄という色彩の性質を「その最も純粋な黄において常にそれ自身明るいという本性をあらわし、明朗で快活で柔らかくも刺激的な性質を持っている」(WA II, 1, S. 310)と表現している。青は「眼に対して特別でほとんど言葉にできないような作用を及ぼす。それは色彩としてあるエネルギーをあらわし、たとえその作用が否定的な側面にあったとしても、その最も純粋な青は同時に、搔きたてるような無であるといえる。それはまなざしの中の刺激と休息の矛盾のようなものである」(WA II, 1, S. 314)といわれる。赤は「真摯さと品位、慈愛と優美さの印象を与える」

(WA II, 1, S. 319)。生理学的色彩では網膜などの身体的な媒体を通じて現れる色彩が扱われ、物理学的色彩ではプリズム、化学的色彩では諸物体の表面という媒体に映し出される色彩が扱っていた。しかしこの感性的・習俗的色彩では、主に感情という媒体に現れる色彩が論じられている。それ以前と比べて媒体の概念が飛躍的に拡張されていると思えるが、誰も色彩と感情との密な関係を否定できない。むしろ、古くから哲学者に色彩を見せると怒り狂いだすといわれるように、元来色彩は感情的なものであるという方が自然である。

「明朗で快活」、「掻きたてるような無」、「慈愛と優美さ」等こうした表現すべては感情、あるいは単なる主観的な感想にすぎないと思える。神秘的であるとさえいえるようなこうした表現に対して、客観的な観点から、そこには個人的嗜好と無関係の光の物理的な運動があるだけだといわれる。そして色彩を学的方法によって解明するというならば、ゲーテが述べていることは幻想にすぎないのではないかという疑いは至極悟性的な判断であるといえる。彼の記述が詩であるなら、そうした誹りは受けないであろうが、ゲーテが行おうとしているのは色彩の学問であり、上述の表現は学的探究の一環であるはずである。それであっては主観的、あるいは偶然的一時的な嗜好であってよいはずがないのではないか。しかしながら、これまでの考察でも明らかなように、こうした探求の仕方がまさにゲーテ自然科学の典型である。

ぼんやり色彩を眺めていると、自然に感情が湧いてくる。夕日を見てきれいだと思える。原色に近い絵の具を使った絵画には力強い印象を受ける。そうした体験の場では、それが主観的でしかないのか、客観的なのかという問いはあまり意味がない。確かに、美が主観に宿るのか客観に由来するのかは伝統的な美学の問題だが、そうした問いは、体験の後になって省察されるものであり、それ以前には主観と客観を分ける線はまだ明確に引かれていない。ゲーテの感情の色彩が主題とするのは、未だ区別が明確でない根源的な体験である。

そのような体験は特別なものではない。人はすべてそのような悟性的分別が起こる前の状態や感情を経験している。例えば小さな子どもが、強風に揺れる窓の外の木を見ながら、「あの木は悲しんでいる」という。この子供の言葉は奇妙である。なぜなら木が悲しむわけがなく、そうした言明は小さな子供の未成熟な思考として見做されるべきであるから。あるいは優しく共感をもっていうなら、繊細な子供の豊かな感性だということもできる。いずれにせよ木に自己意識などなく、悲しみを覚えるはずがない。子供は自分の感情を木に投影している。悲しんでいるのは木ではなく、実はその子供である。客観的かつ合理的に判断すれば、そういわざるをえない。

こうした考えに基づけば、ゲーテに対しても同様のことがいえる。色彩に感情などはなく、ただ個人的な気分を対象に押し付けているにすぎず、赤に優美さなどないのだと。しかしこうした分析は、子供の体験、色彩を見るという現実が届いていない。あるいは認識論の要となるような問題を見過している。子供の体験や色彩の感情はごく自然な経験であるはずなのに、客観的視座からの合理精神に基づいた諸体験の事後的再構成は、そうした根源的な体験を、奇妙な印象や偶然的な感情、神秘体験であるとししか分類できない。自己意識が確立され、啓蒙された理性にとっては、主観と客観と区別は明晰であり、悲しみの所在は判明である。しかしそれ以前に誰もが、根源的で未熟で不可解な状態を経験したことを知っている。そこでは直観と悟性がいまだ分節化されておらず、ただ想像力が自然に臨んでいるだけである。ゲーテはこれを科学の原初的な営為であるという。

5. 結語

ゲーテ色彩論が扱う主題は多岐に及び、それに応じ方法論も広がる。ゲーテは客観的視座一切を否定し、主観性に埋没したわけではない。また、分析的方法を忌み嫌い、総合的な方法に固執したのでもない。合理性をかなぐり捨て、感情に身を委ねたわけでもない。ゲーテは地質学で、大地が火山活動などから成立したと考える火成論や、むしろ大洋から成ったという水成論のどちらにも与せず、あるいは両者の間を揺れ動き、その対立をそのまま残しておいたように、相反するものが並行して存在することを認めていた。対立する教説それぞれが科学の要素であり、それらをもって科学の全体が成立している。そうした科学の全体性が帯びる性質は、進展である。対立する議論は互いに、それぞれがもつ主題や方法論を先鋭化させ、全体をより拡張し、洗練されたものにする。ゲーテは、そうした対立をよく呼吸にたとえる。ゲーテは小論「近代哲学の影響」においてカントのアプリオリな総合判断について述べる文脈で、分析と総合という方法の対立について次のように述べている、「私は自分の全人生において、詩作的にそして観察的に、あるいは総合的にそしてまた分析的な方法をとったのである。人間精神の収斂と拡張は、呼吸のように決して離れることなく常に脈打つからである」(WA II, 11, S. 48)。主観や客観、合理性や感情の両方が成立する領域がゲーテの自然科学が主題とする領域であり、色彩論はそうしたゲーテ的探究の内容をよく表現している。これはゲーテ自然科学に対して雑多な印象を与える原因の一つになっているが、ゲーテはこうした仕方がむしろ元々の科学の姿だと考えている。彼は、古代ギリシアでの科学的探究を手本に取っており、彼らが詩的なまなざしで諸対象を観察していたこと挙げている⁹。

これまで、ゲーテが生理学的色彩で影の色彩を扱い、化学的色彩で白の導出を行い、感性的・習俗的色彩で感情の色彩について述べているのを考察してきた。それぞれ、錯覚としての現象、素朴な体験、主観的な感情という主題を浮き彫りにしており、それらはそのままゲーテ色彩論に対して下される評価の言葉でもある。そしてそうした判断を下すものが真逆の立場に立っていることを示す言葉でもある。つまりその判断が依拠するのは、真の現象、洗練された経験、客観的考察などである。しかしながら、その両方の立場や見方は結局のところ自然あるいは精神の一側面を強調したにすぎない。啓蒙主義の潮流においては、合理性、精密性、客観性が重要視されるが、ゲーテの目にそのようなものが対象のすべてを表現しているわけではないと映る。特に物理学的性質から、網膜、感情へと多岐にわたる色彩論においては、単一の立場や方法で色彩のあらゆる側面を知悉することはできない。とるべき立場や方法は、流動的なものであり、発展的なものである。ゲーテ色彩論が表そうとするものはまさにそうした生成する色彩であり、活動的な精神である。

凡例

WA Goethe, Johann Wolfgang von, Goethes Werke. Herausgegeben im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen, H. Böhlau, Weimar, Abtlg. I-IV. 133 Bände in 143 Teilen. 1887–1919.

註

- ¹ このプリズムを使った光学実験が行われた時期については他の説があり、1791 年ではなく 1790 年 1 月に行われたとする研究もある。ゲーテ『色彩論』第一巻、工作舎、1999 年、p. 630ff の前田富士男の論争編解説を参照。
- ² Vgl. WA II, 1, S. 29f.
- ³ Cf. Mario Vegetti, *Historiographical strategies in Galen's physiology (De usu partium, De naturalibus facultatibus)*. In: Philip J. Van der Eijk (Hrsg.), *Ancient Histories of Medicine. Essays in Medical Doxography and Historiography in Classical Antiquity*, Brill, Leiden, 1999, S. 383-395.
- ⁴ 影の色彩は二つの異なる色彩の光源によって照らされることによって起こる現象である。
- ⁵ Olaf Müller はゲーテの物理的色彩が果たした成果、孕む問題、対立するニュートン光学との関連等を詳細に分析している。Vgl. Olaf Müller, *Mehr Licht*, Frankfurt am Main, S. Fischer, 2015
- ⁶ 染色家坪倉優介は、18 歳のとき交通事故により全ての記憶を失った。それ以降彼は現象の意味や意義、概念といったものを失い、彼の前にはただ裸の現象があるのみになった。例えば、腹部に感じる奇妙な感覚を空腹であると認識できず、風呂の中で震え何かがおかしいと感じながらも冷たさを理解できずに冷水を浴びていた。彼の前には驚きばかりがあり、それを自身の著書にまとめている。そこで色彩についても語っており、人々がエメラルド色の美しい液体を飲み、真珠のような艶やかな白い粒を食べるのを不思議に思った。それらは彼にとってもはやお茶と米ではなく、感嘆すべき物体であり、鮮やかで色とりどりの現象であった。坪倉優介『ぼくらはみんな生きている—18 歳ですべての記憶を失くした青年の手記』幻冬舎、2001 年参照。
- ⁷ すでに多くの経験を積み抽象概念を理解していても、新しい経験がいつでも可能なように、新しく色彩と出会うことも可能である。多くの芸術家が多大な労力でもって行っていることは、見なれた材料と使い古された形式に則りながらも、自身の手でもって新しい、革新的な作品を提示することである。人間と色彩の原初的関係を描きだそうとすることは、特に画家や染色家が主題としたものである。
- ⁸ 本論では詳述しないが、それは想像力の働きに負う。そしてもし言語化が可能であるとすれば、それは論理的なものではなく修辞学的なものであり、ゲーテにおいてそれはとくに象徴と呼ばれるものである。
- ⁹ 「詩の領域から自然観察へと渡り来たギリシア人は、その際〔色彩研究〕まだ詩的な性質をもっていた」(WA II, 3, S. 109)。

キーワード：ゲーテ、色彩論、自然哲学、啓蒙主義、古典主義